

障 壁 児 と 共 に

佐 伯 幸 雄



出 会 い

出会いといふものは予想や計算された線上で起こるというよりも、突然的であり、偶然的であり、強制的にさえある。

ある家庭に先天的にしろ、後天的にしろ、障害児をもつというのは、必ずしも主体的に選びとったことはなかつた。ある日、突然、一つの出来事（不幸）に出会つたことになつたわけである。しかも、その事實を回避することが許されない、深刻な課題がのしかかつてくるわけだ。両親は途方に暮れる。病院や相談所にその救いを求めるが、即効薬のようなものは見当たらない。

最近、自閉児をはじめ、知恵おくれ、機能障害をもつ子どもたちの一般幼稚園、保育所への通園がすすめられるようになつてきた。生きる権利という立場からも、発達心理学的みても、普通児つまり、情緒の正常な発達をとげている子どもたちの中で生活させ、刺激を与えられることの意味が強調されてきている。

しかし、幼稚園や保育所には入園という閑門があつて、入園児を主体的に選択できるようになつていて。したがつて、障害児をもつ子どもは即世話のやける子ども、やつかいな子どもとして除外されてしまふ。つまり、出会おうとしないわけだ。

私たちの園で障害児を受け入れていった場合にも、初めはこのことを自覚的に受けとめたのではないか。偶然、H君との出会いがあつて、大変な子だなあ、とため息をついた思い出がある。H君の探險期行動が間もなく始まつた。彼は幼稚園中のスイッチをおろか、近所の家にまで入つてスイッチを押す。電灯がついたかどうかの反応を確かめて、次のスイッチへと行く。リコピーや輪転機もみな動き出した。とまどいながら、H君の後を追つて消して歩いたが、一巡消し終わったころ、また第二ラウンドになるという具合だつた。

こんなことをくり返していく、どうなるのだろう。不安がつのってきた。相談所へ行つて教えを乞うて、彼の行動を受容すること

とを学んだ。大変なことだった。将来への不安、他の子どもへの

影響など、悪い予感が次から次へと脳裏をかすめた。

しかし、私たちはこの子どもとの出会いを大切にした。親に同情するというより、この親と連帯しておつき合いしていくこと、

ここで園として主体的に受けとめていく決心をした。その決断は私たち教師としての生き方と無関係でありえなかつた。

障害児と普通児

障害児と普通児の間には確かに差はある。しかし、その差は情緒的発達の未発達によるものであり、そして、その原因が身体の障害によるもの、性格的に人一倍感受性の強さをもつたためにひき起こってきたもの、また、環境に彼の発育に不適応要因があると想像されるものなどがあげられる。子どもの情緒発達および精神発達には順序だてがある。その順序だてがうまくいかなくして、トラブルを起こしてきたものとして理解することもできる。ということは、もう一度、発達の順序だてを正しく認識し、一つ

二、モノローグをいつたり、まなざしが合わず、伝達がむづかしい。
三、自分の情緒のおもむくままに行動しようとするので、傍若無人な行動になって表われる。ガラスを割ったり、鉢植えの草花を抜きとつたり、引出しをぶちあけたり、上靴、下靴の区別なく出入りしたり、水を床にまいたり、所かまわらずおしつこをしたり、園外へとび出して街道へとび出る危険もある。

こんなことに出会うと、本当に困ってしまう。しかし、私は危険のないかぎり彼らの行動を受け入れていく。本人に禁止を求めるよりも、普通児との間にトラブルの起きないようガードする。お弁当にもつてきたさくらんぼうをとられてしまうと、先生が用意しておいたさくらんぼうを取られた子どもにあげるので、そう、トラブルにならない。

やがて、数週間を経ると、だんだん、園の中に入ることの不安が融けてくる。普通児の方からの働きかけも徐々に増えてくる。保育の内容も変わってきた。ともすれば、先生の側のカリキュラムをティーチングしようとする傾向があるので、先生の心の

問題に出会うことになる。

一、言語がないためにコミュニケーションがうまくいかない場合。

とはいうものの幼稚園の中で生活させるとすると、さまざまなもの

中に、エジュケート(引き出す)して、こうとするセンスが芽生えてきた。子どものもつている欲求に対し、どのように適切に対応していくべきなのかを毎日のように職員会の議題にするようになってしまった。何よりも一人の子どもが「わかる」ようにならなければならない。

そんなことを、障害児たちは私たちに教えてくれた。保育者としてはあたりまえのことであるのだが、やっぱり課題が先行してしまうことが多い。

私たちの園でも初めは障害のある子どもたちにとまどい、異常さを強く感じて、つい特別視してきた。しかし、今ではそれを子どもたち一人一人の中にある個性的行動やバラエティーともみられるようになってきた。

子どもたちの中にも障害児に対するこだわりがなくなってきた。はみ出た部分は認めてやったり、援助してやったり、相手の感情を察する力が育ってきた。一方障害児の方でも、抑圧感がなくなつて、おおらかな園生活を楽しめるようになってきた。遊びの発展もでてきた。子どもらしいほほえみがその表情の中に出でてきた。生きる喜びなのか、遊ぶ喜びなのか、喜びの表情が表出するようになってきた。いろいろな障害によって起こってきた情緒のこわばりがとれてきて、自分の中に情緒(うれしいとか悲しい

とかの感情)が豊かになつてくると共に、相手の感情も徐々にわかるように育つってきた。

それでもハンディーは後遺症のように依然としてある。にもかかわらず、園全体は初期にあつた異物感がなくなつてきている。

幼稚園での受け入れの条件

条件とは症状によって受け入れたり、断わったりすることさすのではない。

しかし、そうはいつても、手離しで障害児を受け入れられない。私たちは今日まで、物理的にも精神的にもいろいろな工夫をしてきた。たとえば堀を高くして乗り越えられないようにながら、抑圧感のないように鉄柵堀にしたり、目に見えないところに鍵をつけて外部への脱出を防いだ。床は上下はきかえになつているが、自閉的傾向をもつ子どもには下ばきのままあがることも許している。掃除は大変だが、できるだけ清潔な環境を保つようにしている。床や壁にクレヨンで書かれることもある。後始末が大変だが、こうした行為がエスカレートするのではない、やがて終わって、他へ展開していく、やがて周囲との関係がわかつてくると、いつしか普通児の中で目立たなくなつていて。

一クラス三十名だが、その中に二~三名の障害児が混入されて

いる。入園期から一年ぐらいは集団行動がとれず、はみ出しが多い。クラスから出ていった時にはフリーの先生が二名いるのでそこで受けとめ、遊びの相手をする。フリーの先生の役割は、

一、危険防止のため。

二、クラスとの橋渡しのため。

三、個人的な遊びのつき合いをするため、としている。園全体

が連繋プレーだから、放課後、データーを互いに交換し合う。指導の要点としては、全体に自由なふん閑氣を作ることにつとめている。子どもたちの自発性を優先させ、遊びからの発展を重んじようとしているので、障害児たちも興味のあるものには部分的ではあるが喜んで参加している。一期間の間は生活習慣のできなかつた障害児たちが、二期にもなると、必ず何人かの普通児が彼らを助けて、トイレ、上ばき、下ばきの着脱、お弁当の出し入れなどの援助をしながら生活習慣をつけている場面に出会う。

私たちには必要な援助はするが、できるかぎり、普通児の生活のリズムの中に包んでいこうとしている。教師は普通児に「何々してあげて」というような要求をするが、「何々してあげなさい」という指示はしないようにしている。

普通児の中で育つ障害児を見つめることによって、私たちの考

え方もすい分変化してきた。何よりも、子どもたちの内的な欲求や感情の動きをとらえられるようになってきた。保育者として当然のことなのだが、その当然のことを、障害児たちが、新しく教えてくれた。

今後の課題

私たちは保育の仕事の可能性と限界を見いだしながら、保育への一つの道すじを建ててきたように思っている。育ちの順序だけがわかつてきたことによって、途方に暮れることはなくなった。しかし、日常的なこととして、困難な出来事に遭遇する。毎日が鬱いだ、という感じさえする。家庭での子どもの取り扱いのために両親教育もおろそかにできない。教師の理解、労働条件、保育内容の充実など経営的にも、教育的にも問題は多い。しかし、その問題を回避しようとすれば、たままちハンディーをもつ子どもを幼稚園の門から閉ざして疎外することになるだろう。

障害児と本当に連帯して生きるということは、この大変さを日常化していくことではないだろうか。育ちゆく子どもたちの目の輝きの中に大きな慰めを与えるられる。

(杉並教会幼稚園)